

主な未侵入病害虫の解説

セグロモモミバエ

学名: *Bactrocera correcta* (Bezzi)

英名: guava fruit fly

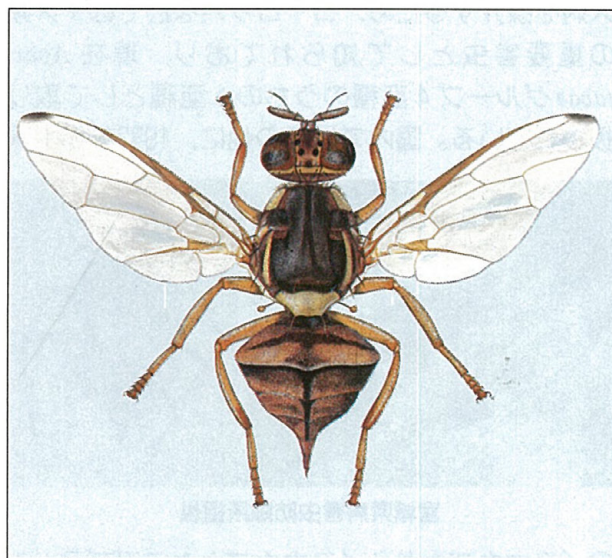
本種は、タイからインドにかけた南西アジアに分布し、ミカンコミバエと同様に多くの熱帯果実類を加害するミバエである。我が国の国際空港で携帯品として持ち込まれた東南アジア産輸入禁止対象果実からもしばしば発見されている。また、アメリカのカリフォルニア州や日本の侵入警戒調査用トラップでも本種が発見されたことがある。

分布 タイ、パキスタン、インド、スリランカ、ネパール

寄主 フトモモ、バンジロウ、マンゴウ、シナナツメ、サボジラ、カリッサ、カンキツ類、ベルノキ、ヒマ、ピタンガ、ビャクダン

形態 体長はミカンコミバエより1回り小さく6mm程度で、頭部の顔面下部に黒褐色の顔紋が1対あり、横長の長楕円形で通常左右の顔紋がつな

がっている。中胸背板は全体的に黒色で、灰色の微毛に覆われており、横縫合線後方に2本の黄色縦帯がある。肩瘤と小楯板は黄色で小楯板刺毛は1対である。翅は全体的に透明で、前縁帯は r_{2+3} 脈の終点付近でとぎれ、 r_{4+5} 脈の先端に黒褐色斑がある(本誌第27号参照)。腹部は全体的に黄色を呈し、第2腹背板は後縁が帯白色、第3腹背板の基部中央から第5腹背板に1本の細い黒色縦帯がある。



輸入禁止生果実からの発見状況 (1995年～1999年)

寄主植物	仕出国	発 見 回 数				
		1995年	1996年	1997年	1998年	1999年
インドナツメ	タイ	1				
サボジラ	インドネシア			1		
	タイ	2	1	3	6	24
	台湾				1	
	不明					1
サントール	シンガポール	1				
	タイ			1		
ナツメ	カンボジア				1	
	タイ	4	10	10	7	6
	ベトナム	1		2		3
	ミャンマー			2		
	ラオス				1	1
	不明			1		
バンジロウ	インド	1				
	タイ	5	6	9	11	13
	ベトナム	3	1	15	5	4
	ミャンマー					2
	台湾			2	1	
	香港				1	
バンレイシ	タイ			1		
マンゴウ	タイ	1	1	4	1	8
	フィリピン					1
マレーフトモモ	タイ		1			
ミズレンブ	ベトナム				1	
モンピン	タイ					1
リュウガン	ベトナム				1	
	台湾					1
レイシ	タイ			1		
レンブ	タイ	6	8	9	13	7
	ベトナム	1	1	3	2	
合 計		26	29	64	52	72

生態 雌成虫は果実の表皮下に産卵管をさして数個産卵し、孵化した幼虫が果実の中心部に向かって食害する。果実内で老熟した幼虫は果実から脱出し、地面に潜って蛹化する。発育に関する情報は少ないが、植物防疫所での輸入携帯品等で発見される害虫の調査結果によるとタイ産のナツメやバンジロウからは頻繁に見つかり、25℃での幼虫期間は7～10日、蛹期間は10日程度である。また、雄成虫はメチルオイゲノールに誘引される。

被害 幼虫が果実内部を食害することによって引き起こされる。本種の寄主範囲がミカンコミバエと重なっているため、その被害程度は、はっきりしていないがフトモモやバンジロウでは本種による被害が多いようである。

防除 ミカンコミバエと同様、誘引剤のメチルオイゲノールによる雄除去法もあるが、マラソン等の殺虫剤と蛋白加水分解物を混合した毒餌の散布や果実への袋かけが実用的である。

Citrus variegation virus (CVV)

英名: citrus infectious chlorosis, infectious variegation

本ウイルスによる病害は、1939年にアメリカ合衆国のカリフォルニア州のレモンで最初に報告された。また、本ウイルスは、試験的に草本植物に伝染が確認された最初のカンキツのウイルスであるが、当初は、Psorosis 病の一つと考えられていた。

分布: 日本を除くほとんどのカンキツ栽培国。

(特にアメリカ合衆国、オーストラリア、地中海沿岸地域)

寄主植物: シトロンの、レモン、スイートオレンジ、マンダリン及びグレープフルーツなどのカンキツ類。

病徴: 新葉に fleck (葉脈及び細脈に沿って生じる0.2～1mm幅の退緑斑) が現れる。この症状は葉が硬化するにしたがって消失し、その後病名の由来となった斑 (variegation) を部分的に伴ったねじれ、ふくれ及びしわを生じる。

病原: 本ウイルスは、直径26～32 nmの球形ウイルスで *Ilarvirus* 属に分類される。接木により容易に感染し、汁液接種によりマメ科等の草本植物に感染する。また、低率であるが種子伝染することが報告されているが、媒介昆虫等は知られていない。病原性の違いにより CVV-1 (強系統) 及び

CVV-2 (弱系統) の2系統が報告されている。また他の *Ilarvirus* 属である *Asparagus virus II*, *Citrus leaf rugose virus*, *Elm mottle virus* 等と血清学的類縁関係がある。

かつて、本ウイルスは、カンキツ新葉の病徴が Psorosis 病のそれと類似していることから、同様の病徴を現す Crinkly leaf, Concave gum, Crista-cortis, Impietratura と共に、Psorosis complex と総称されていた。その後の研究により、Psorosis 病の病原は粒子が繊維状で様々な形態をとる *Ophiovirus* 属の *Citrus psorosis virus* として新たに分類され、本ウイルスとは異なることが明らかになっている。

診断: ササゲ、インゲン、タヌキマメに汁液接種を行うと、接種葉に退緑斑点及びえそ斑点、上葉にモザイク、葉脈透化及びモットル等が現れる。接木検定では、シトロンの及びユウレカレモンが好適な指標植物であり、接種後6～8週間で、葉に fleck, 退緑, しわ, 奇形等が現れる。いずれも、20℃前後の冷涼な環境で検定を行う必要がある。その他の診断法として、ELISA 法や PCR 法が報告されている。

被害: 果実に退緑斑紋及び奇形等の病徴を示すため品質低下をもたらす、経済的価値が減少する。

防除: 無病健全な穂木・苗木を使用すると共に剪定器具等の消毒が重要である。熱処理及び茎頂培養等による無毒化も報告されている。

